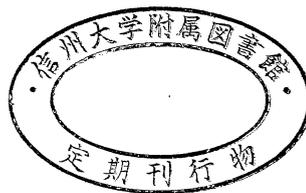


長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡 XI

—— 緊急発掘調査報告書 ——



2002.3

松本市教育委員会

例言

1. 本書は松本市出川町18番1号他に所在する出川南遺跡の第11次発掘調査の報告書である。
2. 本調査はマンション建設事業に先立ち、大成産業株式会社と松本市が委託契約を締結し、それに基づき松本市が実施した。
3. 本調査の現場作業は平成13年5月23日から6月13日、整理・報告書作成は6月18日から平成14年2月28日にかけて行った。
4. 本遺跡の発掘調査は昭和61年から断続的に行われており、遺構番号のうち、住居址については先の調査の連番、その他の遺構については1番から付している。
5. 本書の執筆は、I-2を事務局、II-3を清水究、その他を澤柳秀利が行った。編集は澤柳秀利が行った。
6. 本書の写真撮影は、現場を調査担当者、遺物を宮嶋洋一が担当した。
7. 出土遺物・図面・写真類は、松本市教育委員会が所有し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 Tel 0263-86-4710）が保管している。

目次

例言

目次

I 調査の経緯	2
1 調査に至る経緯	2
2 調査体制	2
II 調査結果	5
1 調査の概要	5
2 遺構	5
3 遺物	10
III まとめ	12
写真図版	13

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

平成10年度に、今回調査地の南に大成建設株式会社によってマンション建設が計画されたため、試掘調査を実施したところ弥生時代及び古墳時代の遺構・遺物の存在が確認されたため緊急発掘調査を実施した。その結果弥生時代から平安時代にかけての集落址が確認された。

今年度、同社により、このマンションに隣接して北側にもう1棟の建設が計画されたため、前回の調査結果を踏まえ、松本市教育委員会では開発区域内の遺跡の保護について同社と協議を行った。当該地内における遺構・遺物の有無については前回建設前の試掘調査及び第6次調査の結果によって明らかになっているため、今年度は事前の試掘調査を実施せず、建設工事着手前に、松本市教育委員会が緊急発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとした。

2 調査体制

調査団長 竹淵公章（松本市教育長）

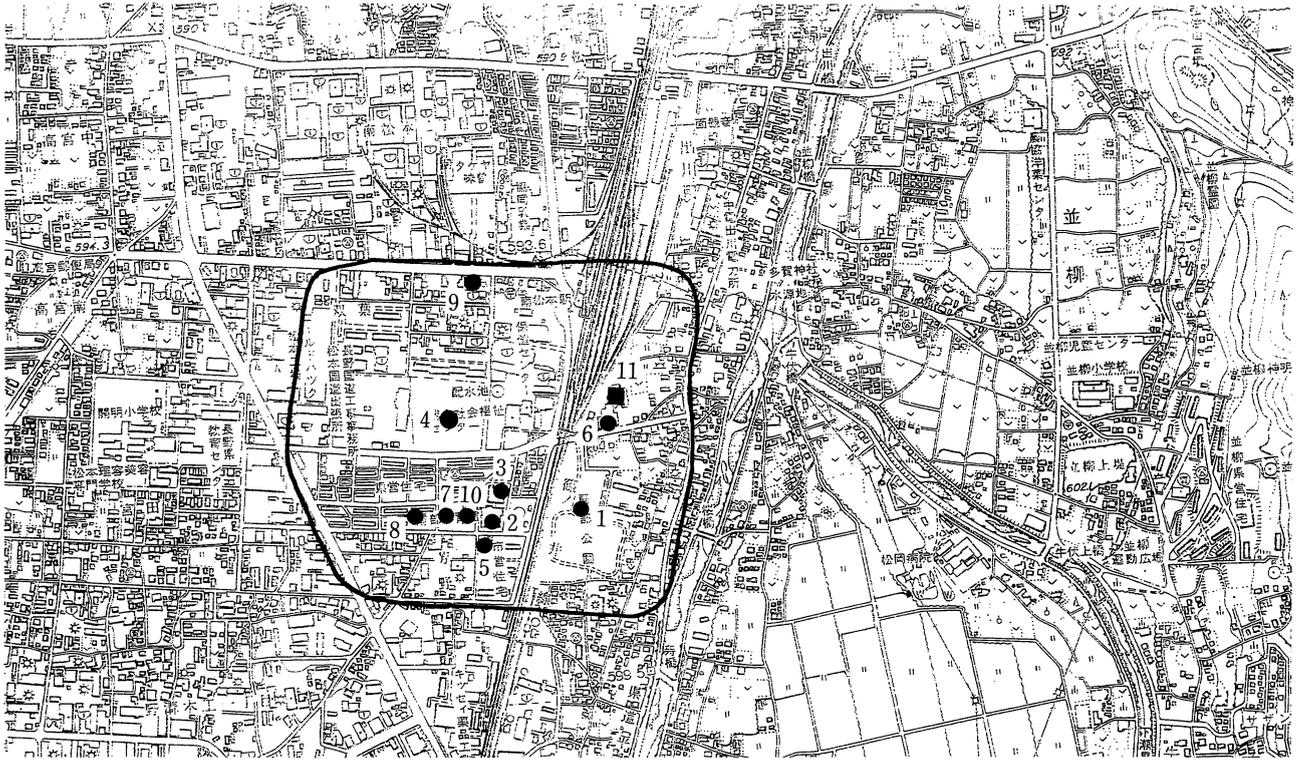
調査担当者 澤柳秀利、清水究

調査員 松尾明恵、宮嶋洋一

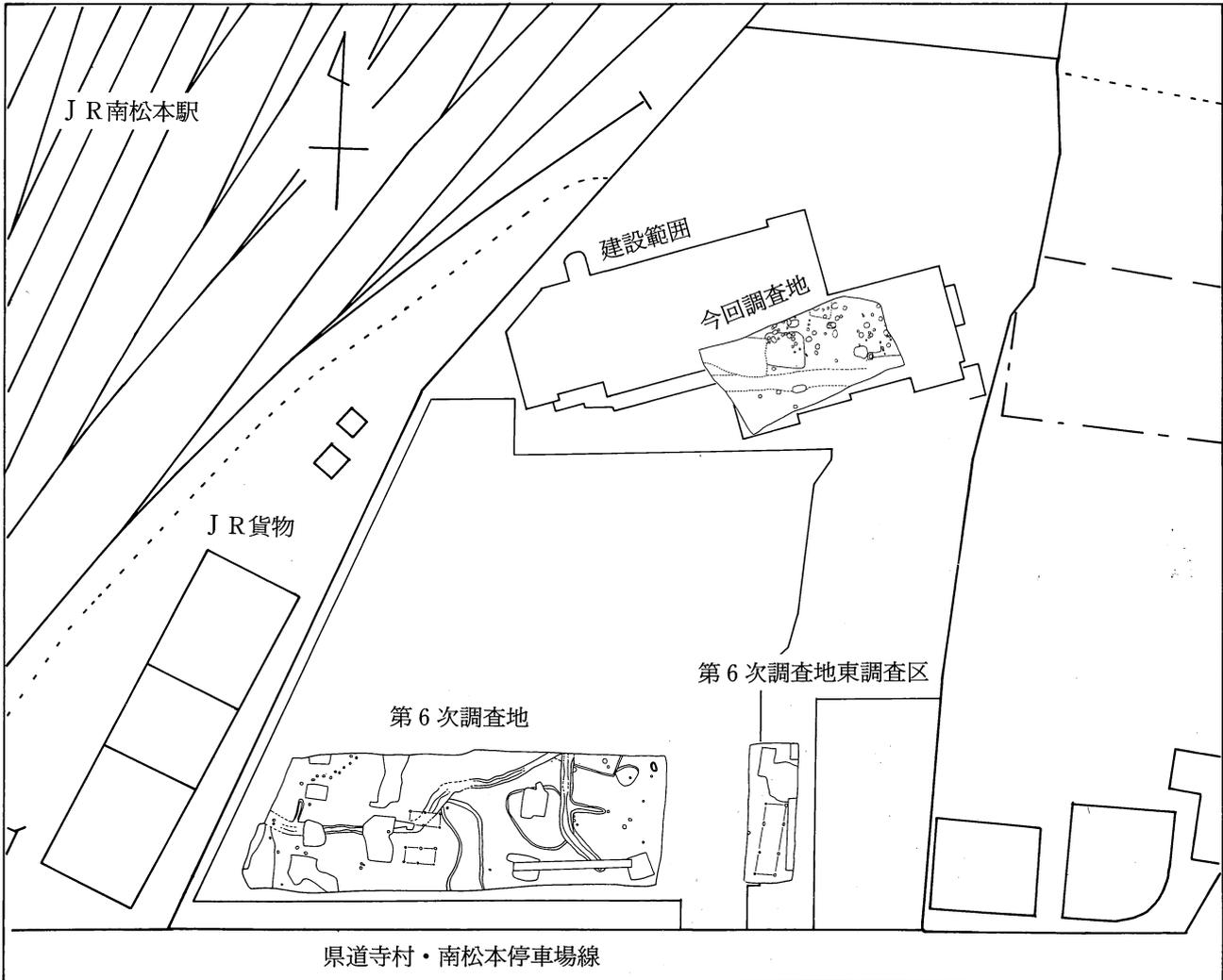
協力者 荒木稔、飯田三男、石川光男、今村克、大月八十喜、神田栄次、北野智之、中原あゆみ、中村恵子、藤本利子、待井敏夫、齋國成、山崎照友、渡邊順子

事務局 松本市教育委員会文化課

有賀一誠（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、松井敬治（文化財担当係長）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）

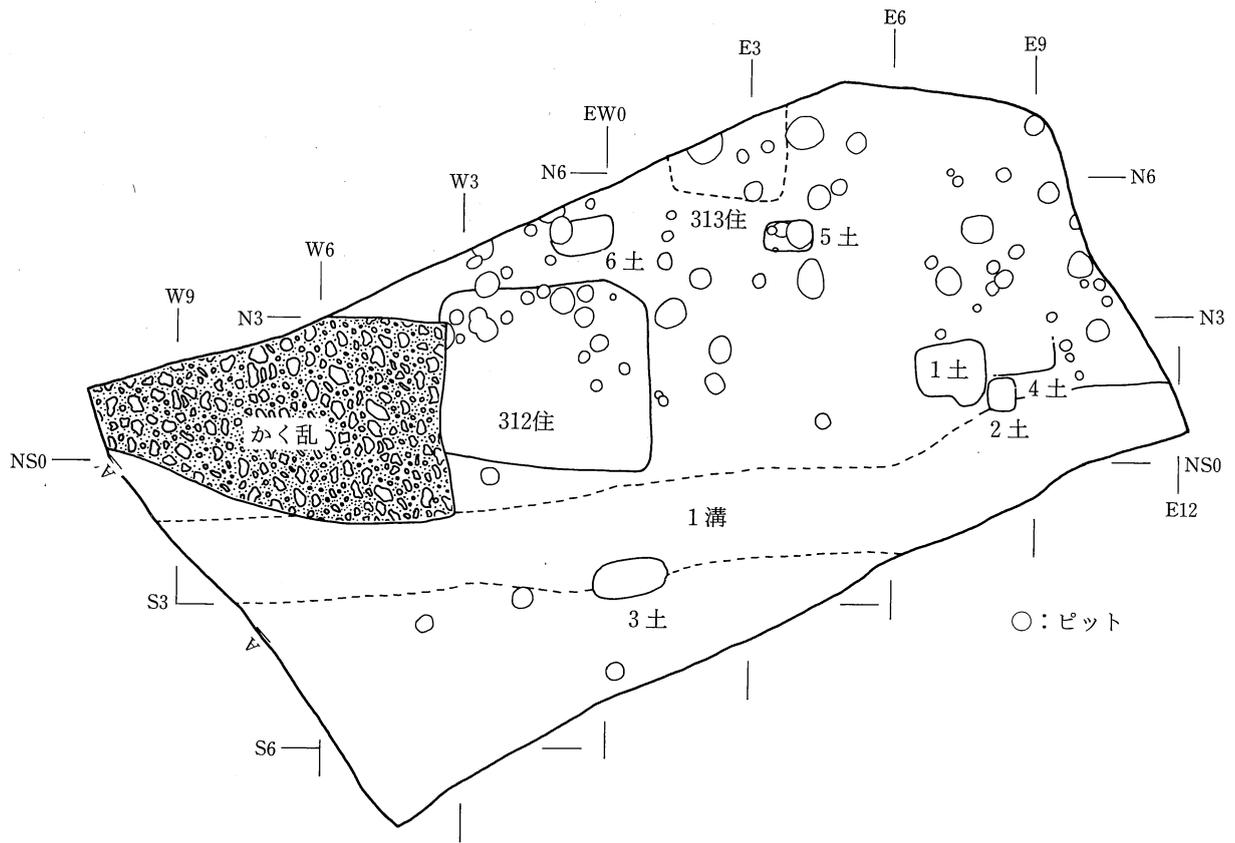


第1図 遺跡の範囲と調査地点 ●印：1～10次、■印：今回調査地点 S = 1 : 15000

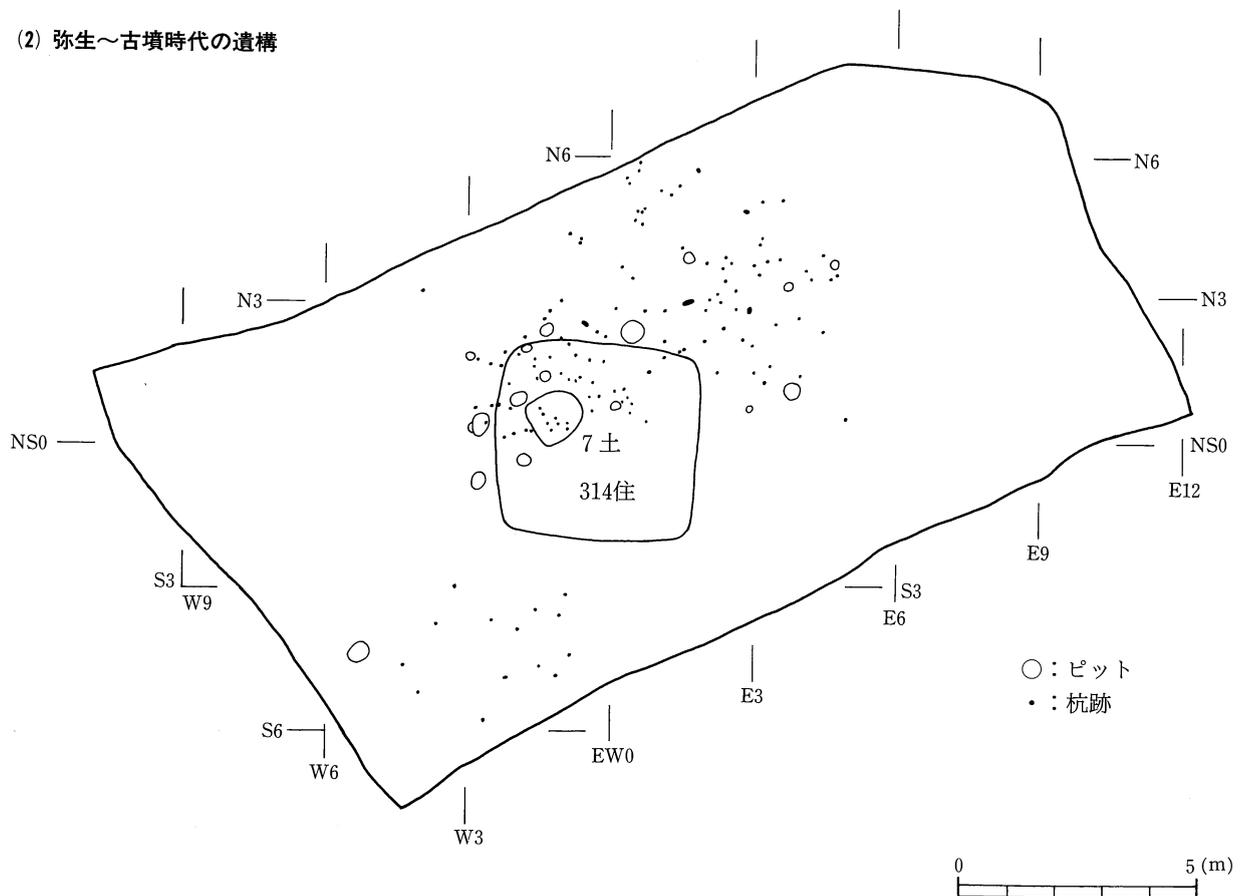


第2図 調査範囲 S = 1 : 800

(1) 平安時代～中世の遺構



(2) 弥生～古墳時代の遺構



第3図 出川南遺跡11次 遺構配置図

II 調査結果

1 調査の概要

今回の調査地は、前回第6次調査地のすぐ北側にあたる。前回調査では弥生時代～平安時代の遺構・遺物が確認されている。今回も、上層で平安時代後期～中世、中層で古墳時代中期、下層で弥生時代後期といった面を調査することができた。発見された遺構は、竪穴住居址3棟、土坑7基、ピット94個、溝1条、流路址2条、杭跡138個であった。ここでは、今回発見された遺構について述べていく。

2 遺構

竪穴住居址

第312号住居址（第4図）

第1検出面、調査区中央部で検出した。試掘調査の段階で被熱した石及び床面がトレンチによって確認されていたが、遺構自体の検出は困難であった。それらの石は住居廃絶後に投げ込まれたものとみられる。壁はあまり残存せずほぼ垂直に立ちあがる。床面は非常に硬くしまっている。カマドは東壁北隅で検出した石組粘土カマドで残存状況はあまり良好ではない。ピットは8個検出され、そのうちP₇は柱穴と考える。また、住居内土坑が4基みられた。そのうちの土₁からは216gの鉄滓が出土しているが、鍛冶炉であるとの確証は得られなかった。その他の土坑は遺物もなく、全く用途は不明である。遺物は土師器杯・皿・盤・椀、灰釉陶器椀などの食膳具の他、覆土中からふいご羽口、床下から鉄滓が32gといった製鉄に関連する遺物も出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期と考える。

第313号住居址（第4図）

第1検出面、調査区北部で検出した。本址周辺での遺構が上面で検出できなかったため、第2検出面まで掘り下げることになった。しかし検出中に床面らしき面を確認したため更に調査したところ、調査区北壁の土層から、ほぼ垂直に立上る壁が確認されたため住居址であると判断した。床面は硬くしまっている。カマドは調査区外にあるとみられる。ピットは床面範囲内に4個みられたが、本址に伴うものかは不明である。遺物はほとんどみられず、灰釉陶器短頸壺、古墳時代中期の高杯が各1点出土したのみである。時期については遺物が少ないため特定することは難しいが、平安時代に属すると考える。

第314号住居址（第4図）

第3検出面、調査区中央部で検出した。当初は、古墳時代の面に堆積した灰色砂質土の落込みとしか確認できなかったが、その下層から、弥生時代後期の土器及び床面を確認した。壁はほぼ垂直に立ちあがり、良く残存する。床はあまり硬くない。炉は地床炉で、中央やや北寄りに掘り込まれる。ピットは確認できなかった。遺物は多くみられないが、床面から弥生土器甕が出土している。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期に属すると考える。

土坑

全部で7基検出した。その多くは平安時代～中世に属するとみられるが、用途については明らかにできるものは少ない。ここでは用途の明らかなもの、特徴的なものについて述べていく。

第1号土坑（第5図）

第1検出面、調査区東部で検出した。南壁が突出した長方形を呈している。覆土は灰褐色砂質土で、壁は垂直に掘り込まれており、底部も硬く締められている。本址の時期については、遺物を伴わないため不明であるが、1溝に接して掘られていることから1溝と同時期或は以降であると判断し、平安時代末から中世にかけてと考える。

第3号土坑（第5図）

第1検出面、調査区南部で検出した。長軸の方向はN-77°-Eを示し、東壁に突出部がある。覆土は焼土・炭化物を含む灰褐色土で下層に炭化物層がある。底部には20～30cm大の礫が敷いてあり、その隙間などに骨片が混じっている。また礫のみられない部分には、硬く締めた土が南北の堤状に存在している。北側の壁際には棺に用いられた木材とみられる炭化材が残存している。火葬施設内には六道銭が埋納されることが多いが、本址からはそれを含めて遺物の出土はなかった。時期については遺物が伴わないため詳細については不明だが、1溝を切っているため12世紀以降の中世に属すると考える。

ピット

今回の調査では1～3検出面で94個のピットを検出した。1面では77個のピットがみられ、これらはそのほとんどが1溝の北側に存在するため、溝に区画された建物址を構成する可能性はある。しかし柱痕の明瞭なものは少なく、配列のみからそれを明らかにすることはできない。2面、3面のものについては、その性格を明らかにするには至らなかった。

溝址・流路址（第5図）

今回の調査で検出した溝址は1条で、調査区南部をほぼ東西方向を指向しており、調査区内で確認された長さは18mに及

ぶ。出土遺物は少なく、図化し得たものは、上層に近いところから出土した中世の山茶碗片と白磁皿片の2点のみである。掘り方は半円形を呈し、ほぼ直線状に掘られていること、底部に流水痕が見られないことなどから、本址は人為的な溝であると考えられる。用途としては、本址北側において多くのピットが検出されていることから、これらのピットが構成する建物を区画していた溝の一部ではないかと考えられる。本址の時期は、遺物からみて12世紀以降の中世と考える。

流路址は、2、3面で各1条検出されている。2面のものは、河川の洪水による一時的なオーバーフローであるとみられ、幅・深さともに不定である。3面のものは断面が半円形であり、また幅も一定しているため、流路というよりは人工的な溝の可能性もあるが、調査の日程上詳細な調査をし得なかったため、詳細については不明である。

杭跡

今回の調査で、主として3面から直径5cm程度の小さいピットが多数検出された。当初は、この地が以前は水田であったことから、そのハゼ木によるものではないかと考えた。しかし水田耕作面より80cm下と深いことから、ここまで届くとは考えられないため、古代の杭跡と考えた。検出した杭跡の総数は138個を数える。規模は概ね直径5cm程度、深さは10cm前後である。覆土は3種類に分けられ、①灰褐色砂質土、②茶褐色砂質土、③淡黄褐色砂であるが、基本的にすべて砂質土である。個数は①が半数以上の70個でもっとも多く、次に③の44個、②が21個となっている。それらを覆土の差によって用途の違いを判断することはできないが、断面観察が可能であったいくつかの底部は尖っていることから、水中に打ち込まれた杭が抜けたか、或いは朽ちた痕跡で、そこに砂が流れ込んだものとみられる。

第1表 出川南遺跡11次住居址一覧表

(): 推定、< > : 残存

No	面	平面形	規模		主軸方向	カマド形態 種類 位置	ピット	時期	備考
			長軸×短軸×深さ(cm)	床面(m ²)					
312	1	隅丸長方形	440×380×23	(16.34)	N-5°-W	石組粘土 東壁北隅	8	11世紀後 平安後期	住居内土坑4基あり、鉄滓出土(土、床下)、 ふいご羽口出土、西側一部攪乱される
313	1	隅丸方形か	240×(150)<24	<3.16>	不明	不明	4	不明 平安か	床面の範囲によって確認した 北西部調査区外
314	2	隅丸方形	424×420×64	14.42	N-2°-E	地床炉 中央やや北	なし	3世紀後 弥生後期	

第2表 出川南遺跡11次土坑一覧表

< > : 残存

No	面	平面形	規模	時期	備考
			長軸×短軸×深さ(cm)		
1	1	不整長方形	148×146×60	中世か	
2	1	円形	62×60×12		
3	1	不整長方形	158×75×48	中世	火葬施設・長軸方向東側に張出部(焚き口)を有し、底部に石を敷く。焼骨出土
4	1	不明	<144>×<60>×12		
5	1	楕円形	102×64×30		
6	1	楕円形	136×72×20		
7	2	円形	108×98×16		

第3表 出川南遺跡11次溝・流路址一覧表

(): 推定、< > : 残存

No	面	起点 座標	終点 座標	断面形	規模 (cm)			時期	備考
					長さ	幅	深さ		
1溝	1	S1-E9	S2-W9	半円形	<1800>	450	70~80	中世、12世紀か	3土に切られる。東西端とも調査区外、区画溝か
流路1	1	NS0-E7	N7-E3	皿状	<700>	80~100	10~15	不明、平安か	河川の氾濫による一時的なものか
流路2	3	不明	不明	半円形	不明	190前後	30~40	弥生時代	詳細な調査をしていない、自然流路か

第4表 出川南遺跡11次ピット一覧表(1)

(): 推定、< > : 残存

No	面	平面形	規模(cm)	備考	No	面	平面形	規模(cm)	備考
			長軸×短軸×深さ					長軸×短軸×深さ	
1	1	円形	12×12×32		16	1	楕円形か	22×<16>×28	東側区域外にかかる
2	1	円形	20×18×14		17	1	楕円形	60×40×14	
3	1	円形	28×26×27		18	1	円形	24×22×10	
4	1	円形	24×24×10		19	1	円形	50×46×14	
5	1	円形	68×56×4		20	1	円形	44×40×30	
6	1	円形	28×26×14		21	1	円形	78×66×56	
7	1	円形	28×24×12		22	1	円形	24×24×7	313住内
8	1	円形	38×34×16	P9を切る	23	1	円形	26×24×6	313住内
9	1	円形	<26>×26×18	P8に切られる	24	1	円形か	76×<40>×12	313住内 北側区域外にかかる
10	1	円形	16×16×7		25	1	円形	42×36×20	313住内
11	1	円形	20×18×5		26	1	円形	18×18×7	P27を切る
12	1	円形	18×18×8		27	1	円形	30×20×6	P26, 28に切られる
13	1	楕円形	40×40×26		28	1	円形	56×56×6	P27を切る
14	1	円形	41×39×26		29	1	円形	12×10×7	
15	1	円形	44×40×38		30	1	円形	52×44×14	

第4表 出川南遺跡11次ピット一覧表(2)

No	面	平面形	規模(cm)		備考	No	面	平面形	規模(cm)		備考	
			長軸×短軸×深さ						長軸×短軸×深さ			
31	1	楕円形	82	52	×8	64	1	不明	50	46	×22	P61を切る
32	1	円形	30	26	×10	65	1	円形	40	34	×14	
33	1	円形	44	44	×12	66	1	円形	34	30	×22	
34	1	長円形	70	54	×39	67	1	円形	26	22	×8	
35	1	楕円形	60	46	×16	68	1	円形	18	18	×6	
36	1	長円形	44	34	×6	69	1	円形	16	16	×6	
37	1	円形	32	30	×10	70	1	円形	20	16	×20	P71を切る
38	1	不明	56	<20>	×14	71	1	円形か	16	<14>	×24	P70に切られる
39	1	円形	50	50	×14	72	1	不明	58	<18>	×12	攪乱を受ける
40	1	円形	24	22	×12	73	1	円形	34	30	×6	
41	1	不明	46	<36>	×34	74	1	円形	22	22	×11	
42	1	楕円形	<32>	22	×16	75	1	円形	18	18	×12	
43	1	円形	26	24	×16	76	1	円形	18	14	×11	
44	1	円形	58	46	×38	77	1	円形	20	18	×9	
45	1	円形	24	22	×30	78	3	円形	44	40	×20	
46	1	円形	28	26	×30	79	1	楕円形	50	36	×29	
47	1	円形	22	22	×20	80	1	円形	58	50	×8	
48	1	円形	40	38	×10	81	2	円形	38	36	×20	
49	1	円形	50	50	×10	82	2	円形	16	16	×4	
50	1	円形	42	40	×28	83	2	円形	50	48	×14	
51	1	円形	20	20	×21	84	2	円形	20	20	×12	
52	1	円形	22	20	×18	85	2	円形	18	16	×7	
53	1	円形	30	28	×32	86	2	円形	34	30	×14	
54	1	円形	56	50	×20	87	2	円形	30	26	×12	
55	1	円形	36	34	×30	88	2	円形	34	32	×8	
56	1	円形	40	40	×26	89	2	楕円形	50	40	×10	
57	1	長円形	28	22	×22	90	2	円形	20	20	×7	
58	1	円形	38	36	×18	91	2	円形	28	26	×10	
59	1	円形	22	22	×13	92	2	円形	22	20	×14	
60	1	円形	22	22	×16	93	3	円形	30	30	×16	
61	1	不整長円形	74	58	×20	94	3	円形	20	16	×19	P64に切られる
62	1	円形	34	32	×20	95	3	円形	22	22	×18	
63	1	円形	14	12	×24	96	3	円形	22	22	×14	

第5表 出川南遺跡11次出土土器一覧表

()は推定値

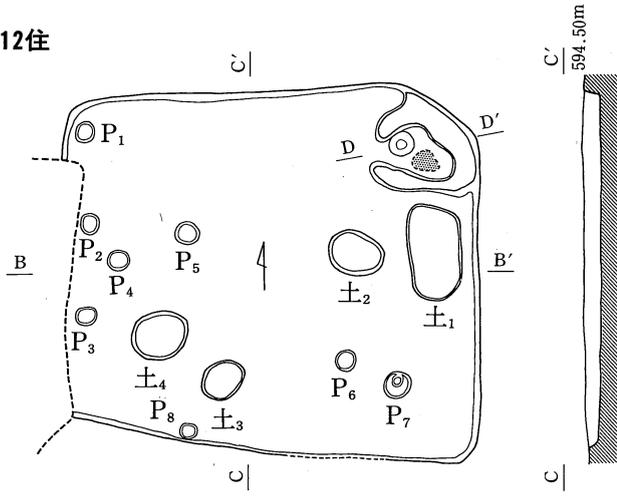
No	出土地点・注記	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度			調整		備考	実測No
							口縁	高台	底部				
1	312住No3	土師器	椀	(14.4)	(7.6)	(4.7)	一部	7/8	完	ロクロナデ	付高台 回転糸切り 口縁ヨコナデ	内面一部タール附着	312住-1
2	312住No8	土師器	盤B		9.0			1/4	完	ロクロナデ	付高台 回転ヘラケズリか	内面一部タール附着	312住-2
3	312住No2	土師器	椀		5.6			ほぼ完	完	ロクロナデ	付高台 回転糸切		312住-3
4	312住フク土	黒色A	椀		(5.4)			1/4	完	ロクロナデ	付高台 回転ヘラケズリ	内面黒色処理後ミガキ	312住-4
5	312住No5	土師器	盤B	8.5	5.0	2.5	ほぼ完	1/2	完	ロクロナデ	付高台 回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-5
6	312住フク土	土師器	盤B	(9.6)	(5.0)	(2.3)	1/8	1/3	1/2	ロクロナデ	付高台 回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-6
7	312住No1	土師器	杯	9.4	5.1	1.85	3/4	—	完	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-7
8	312住No7	土師器	皿	9.4	4.3	1.95	ほぼ完	—	完	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ	回転糸切痕による歪有	312住-8
9	312住カマド	土師器	杯	9.4	5.8	1.65	3/4	—	完	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-9
10	312住No10	土師器	皿	9.4	5.5	1.7	ほぼ完	—	完	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-10
11	312住No9	土師器	杯	9.6	4.8	1.95	2/3	—	完	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-11
12	312住フク土	土師器	杯	(10.2)	(4.4)	(2.0)	1/3	—	1/5	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ		312住-12
13	312住カマド	土師器	椀	(13.4)			1/6	—		ロクロナデ	口縁ヨコナデ	内面タール附着	312住-13
14	312住No4	灰釉陶	椀	(16.0)			1/8			ロクロナデ	口縁ヨコナデ		312住-14
15	312住No11	土製品	籬羽口				—	—	—				312住-15
16	313住No1	灰釉陶	小壺	3.0	3.6	4.0	3/8		3/8	ロクロナデ	口縁ヨコナデ		313住-1
17	313住No2	土師器	高杯		(16.4)				一部	外ナデ後ミガキ 底部ナデ 内工具ナデ ヨコナデ		穿孔	313住-2
18	314住No1,2	弥生	甕	(21.0)			1/4			外上ハケメと波状施文 下ミガキ 内上ミガキ		外面一部炭化物附着	314住-1
19	314住No3	弥生	甕	13.2			1/2			外波状施文 内工具ナデ 口縁ヨコナデ		内面に指頭圧痕有	314住-2
20	溝1フク土	土師器	杯	(13.0)		5.1	1/2			外ハケメ 内工具ナデ 口縁ヨコナデ			溝1-1
21	溝1フク土	山茶碗	椀		(7.6)			1/3	1/3	ロクロナデ	付高台 口縁ヘラケズリ	高台に靱圧痕有 歪有	溝1-2
22	溝1フク土	白磁	皿	(11.6)			一部			ロクロナデ	口縁ヨコナデ		溝1-3
23	I 検検出面	土師器	杯	(9.2)	(5.0)	(1.9)	3/8		3/4	ロクロナデ	回転糸切り 口縁ヨコナデ		検-1
24	I 検検出面	土師器	皿	(10.6)	(6.0)	(1.4)	1/8	一部		ロクロナデ	付高台 口縁ヨコナデ		検-2
25	II 検北壁T	弥生	高杯		11.5				3/4	外ミガキ後朱彩 内工具ナデ			T-1
26	グリッド-1	弥生	甕		6.6				1/4	外手持ちヘラケズリ 内工具ナデ 底部ナデ			G-1
27	グリッド-2	弥生	甕		6.6				1/3	外手持ちヘラケズリ 内工具ナデ 底部ナデ			G-2
28	グリッド-3	弥生	壺か		7.6				1/5	外ナデ 内工具ナデ 底部ナデ			G-3

第6表 出川南遺跡11次出土金属製品一覧表

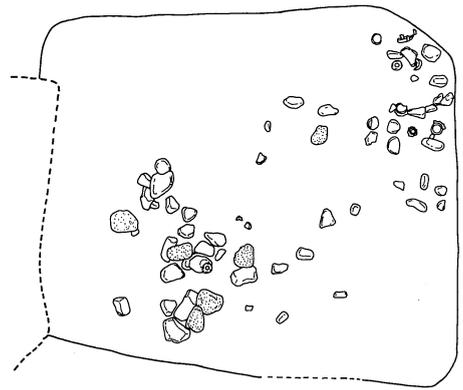
単位(長さ・幅・厚さ: mm、重量: g)、現存値

No	遺構	区	種別	長さ	幅	厚さ	重量	時期	図版	備考
1	グリッド(N3-E9)	6	鉄鏃	94	28	2.5	6.72	平安時代以前か	3	身部長47、厚さ2、銚代部長46、厚さ2.5
2	第3検出面	6	刀子か	49	15	4.0	5.46	不明	—	刀子の先端部分か
3	第2検出面	6	不明	25.5	6	4.5	1.57	不明	—	用途不明品

312住

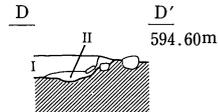


312住遺物出土図



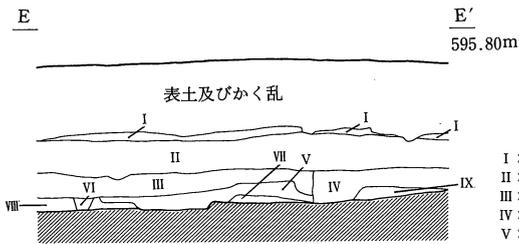
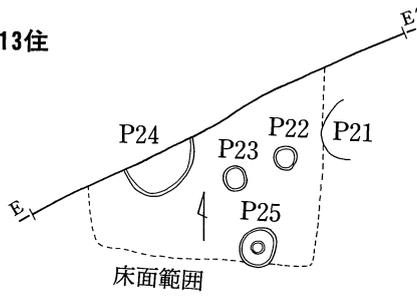
I : 灰褐色砂質土 (茶褐色土粒・炭化物粒少量混入)

312住カマド



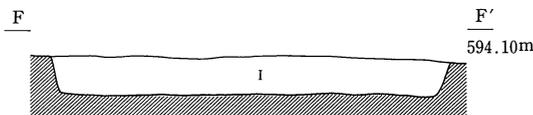
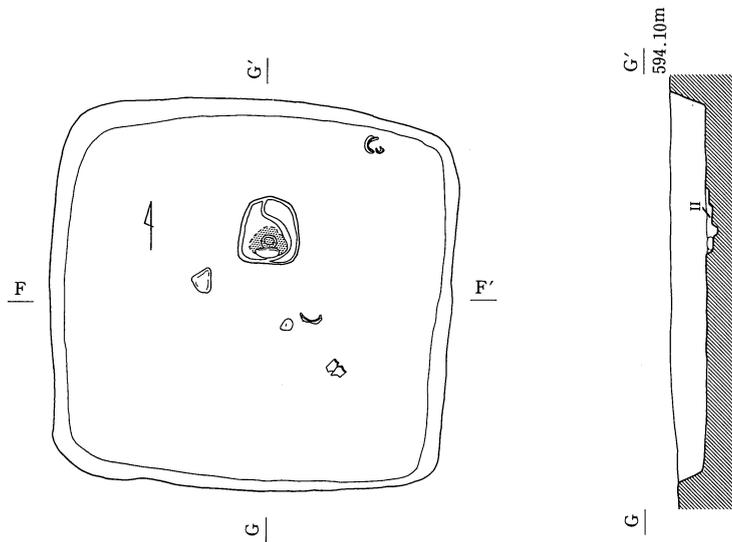
II : 灰褐色砂質土 (茶褐色土粒、焼土粒微量混入)

313住



- I : 灰色土、底部に鉄分沈殿 (水田耕作土)
- II : 黄褐色土 (水田基盤土)
- III : 灰褐色土
- IV : 灰褐色土 (茶褐色土粒混入)
- V : 灰褐色土 (茶褐色土粒微量混入) 313住
- VI : 灰褐色土 (茶褐色土粒微量混入) ピット
- VII : 灰褐色土 (茶褐色土粒多量混入)
- VIII : VII'
- IX : 灰褐色土 (1~2cmφ礫多量混入) 流路

314住

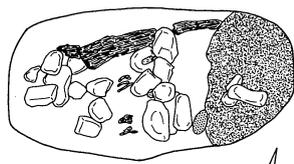


I : 暗茶褐色土 やや砂質
II : 暗茶褐色土 (炭化物粒・焼土粒少量混入)

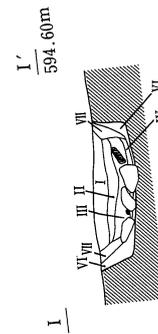
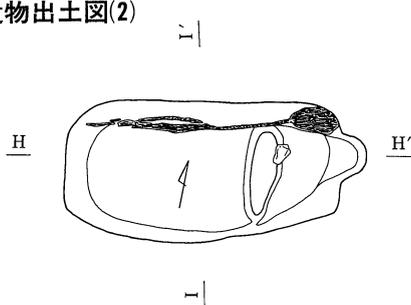


第4図 第312・313・314号住居址

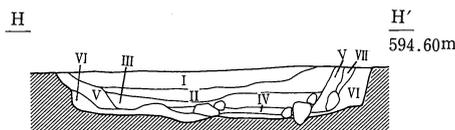
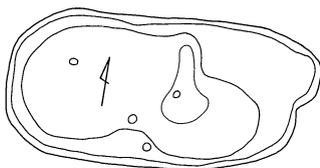
3 土遺物出土図(1)



3 土遺物出土図(2)

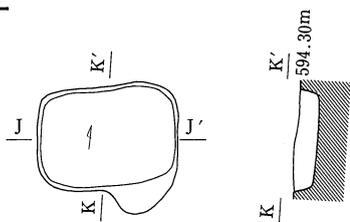


3 土



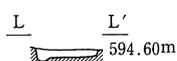
- I : 灰褐色土 (茶褐色土粒・炭化物粒・焼土粒少量混入)
- II : 灰褐色土 (炭化物粒・焼土粒混入)
- III : 茶褐色土 (焼土粒・塊多量、骨片少量混入)
- IV : 炭化物・材
- V : 茶褐色土 (炭化物粒、焼土粒少量混入)
- VI : 灰褐色土
- VII : 赤褐色土

1 土



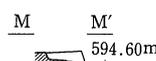
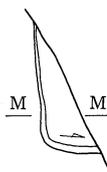
灰褐色土やや砂質 (茶褐色土粒少量混入)

2 土



茶褐色土

4 土



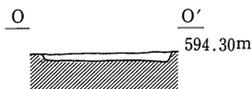
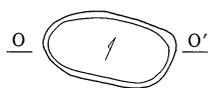
灰褐色土やや砂質 (茶褐色土粒微量混入)

5 土



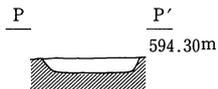
灰褐色砂質土

6 土



暗茶褐色土

7 土

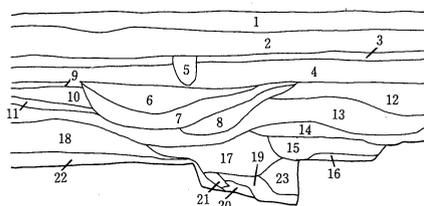


灰褐色砂質土 (茶褐色土粒・褐色土粒・塊少量混入)

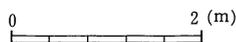
1 溝及び土層図



表土及びかく乱



- 1 : 灰色粘質土 (水田耕作土)
- 2 : 黄褐色土やや粘質 (基盤土)
- 3 : 灰褐色土 (黄褐色土粒・炭化物粒少量混入)
- 4 : 灰褐色土やや粘質 (黄褐色土粒微量混入)
- 5 : 灰色土
- 6 : 灰褐色砂質土 (茶褐色土粒微量混入)
- 7 : 灰褐色砂質土
- 8 : 灰褐色砂質土 (茶褐色土粒混入)
- 9 : 灰褐色砂質土 (黄褐色土粒・砂粒少量混入)
- 10 : 茶褐色粘質土
- 11 : 灰褐色砂質土 (黄褐色土粒・砂粒少量混入)
- 12 : 灰褐色砂質土 (黄褐色土粒・砂粒少量混入)
- 13 : 暗茶褐色粘質土
- 14 : 灰色砂質土 (鉄分沈殿)
- 15 : 暗灰色砂質土
- 16 : 砂層
- 17 : 灰色砂質土
- 18 : 灰褐色砂質土
- 19 : 灰色粘質土
- 20 : 灰色粘質土 (灰色強い、鉄分沈殿)
- 21 : 灰色粘質土 (灰色弱い)
- 22 : 礫層
- 23 : 灰褐色粘質土



第5図 土坑(1~7)、1溝

3 遺物

弥生時代の土器 (第6図)

弥生時代の遺物の出土した遺構として確認されたのは314住のみで、その他は検出面及び包含層からの出土である。年代幅は遡っても弥生時代後期に収まると思われる。

314住出土の土器はNo.18、19を図化し得た。いずれも甕である。No.18は、口縁部から頸部にかけて、特に頸部を中心に波状文が施される。施文順は下段→上段である。簾状文は施されていない。胴部は内外面ともミガキがされ外面は縦、内面は横方向である。器形は口縁部がやや長く外反、外開し、ゆるやかに頸部で曲がり、胴部で丸みを帯びて張っている。また胴部の直径は口径を上回る。No.19もNo.18と同様の形状を示すが、頸部の波状文が胴部の上位まで広がるのが若干異なる。施文順は、磨耗しているため不明である。また、内外面ともミガキはされず、内面においては指頭圧痕が確認されているのみである。以上の点からこの2点は弥生時代後期の土器と考える。

遺構外の土器は、2面北壁トレンチのNo.25と、グリッドのNo.26～28の4点である。No.25は高杯の杯部直下の脚部である。調整は外面が朱彩され、ミガキがされる。内面は工具ナデが施される。厚手で脚部先端部が内面に屈曲していることが特徴として挙げられ、弥生時代後期に属すると考える。No.26、27は甕の底部、No.28が壺の底部であると思われる。いずれも底部のみであり、弥生時代のものとみられる、としかいえない。

古墳時代の土器 (第6図)

古墳時代の土器は、313住出土のNo.17、1溝下の土層(第5図 1溝及び土層図17層中)からのNo.20の2点のみと少ない。No.17は土師器高杯で、特徴として外面から内面への穿孔と、脚部が大きく広く屈曲することが挙げられる。調整は外面がナデ後ミガキがされ、内面は胴上部が工具ナデ、脚部が横ナデを施される。以上からNo.17は古墳時代中期に属すると考える。No.20は土師器杯で、口縁が外反せずに収まる形状を呈する。調整は口縁端部内面に工具ナデがされるのが特徴的である。No.20の時期は古墳時代中期に属すると考える。

平安時代の土器・陶器 (第6図)

平安時代の遺物は、312住からの出土が主体をなし、その他は検出面、包含層からの出土である。

312住からは、土師器杯、椀、皿などの食膳具が多く出土し、煮炊具や貯蔵具はみられない。土師器杯A IIは4点(No.7、9、11、12)あり、いずれも小型で器高が低く、皿と見分けがつかない特徴をしており、口径は9.4～10.2cm(平均9.65cm)、器高は1.65～2.0cm(平均1.86cm)で古代14期前後と考えられる。No.8、10の2点は口縁端部に面取りが施してある土師器皿A IIで、口径はいずれも9.4cm、器高は1.7～1.95cm(平均1.83)であり、これらは古代14期に相当すると考える。No.2、5、6の3点は盤Bで、法量が2つに分かれることから、古代11～14期に相当する。No.14の灰釉陶器、No.4の黒色土器A椀については、古代7期以降であるとししかいえない。土師器椀は3点(No.1、3、13)で、ロクロ使用、底部回転糸切り、付高台がされている。No.1はゆるやかに腰が張るものである。No.3は底部のみであるが、高台がやや外に広がった小椀である。No.13は体部の一部であるとししかいえない。

313住からはNo.15の灰釉陶器小壺が1点出土している。短頸壺が小型化したものとみられるが、短頸壺が平安時代中期～後期にわたって確認されることから、それに該当するものとする。

遺構外の土器で図化し得たものは第1検出面の土師器杯A II(No.23)と土師器皿A II(No.24)がある。No.23は口径9.2cm、器高1.9cmであり、No.24は口径10.6cm、器高1.4cmであることから、いずれも312住と同様の古代14期前後に相当すると考えられる。

参考文献 長野県埋蔵文化財センター 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」松本市内その1 総論編

中世の土器・陶磁器 (第6図)

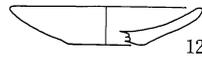
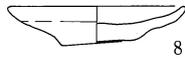
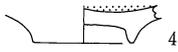
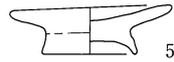
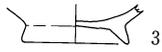
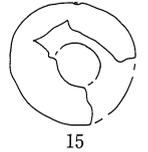
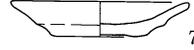
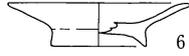
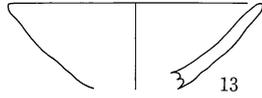
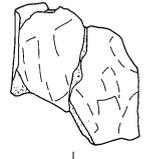
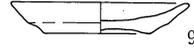
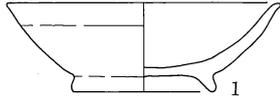
中世の遺構は、3土などがみられるが、遺物を出土しているものはほとんどない。図化し得たものは、1溝出土の山茶碗片(No.21)と白磁碗片(No.22)の2点である。山茶碗は、椀の底部で高台高も0.5cmと低く、靱圧痕がつくことから東濃産の12世紀台の所産である。白磁皿は小破片のため判然とししないが12世紀に属すると考える。

金属製品 (第6図)

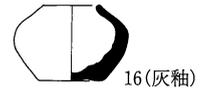
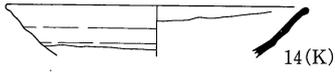
今回の調査では金属製品の出土は少ない。用途の分かるものは、鉄No.1のみである。No.1は鎌であり、遺構内出土ではなく検出面の遺物である。身部から篋代(のしろ)部の途中まで残存している。鎌身断面は両丸造り或いは片丸造りであると思われる。頸部断面は長方形であり、篋代断面は方形となっている。時期については平安時代以前と思われるが、はっきりしない。No.2は刀子の先と考えられるが、詳細は不明である。No.3は不明品である。

その他に2面で銅製品の小片が出土しているが、非常に小さい破片であり、何であるのかは判らない。

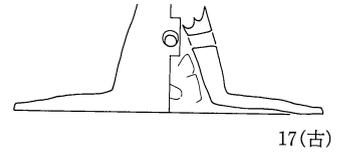
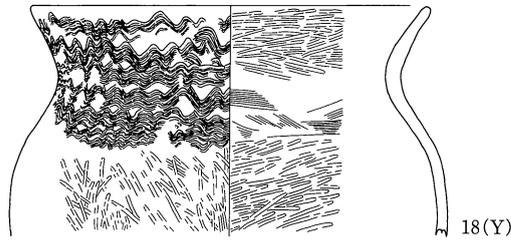
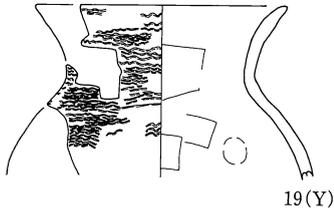
312住出土 (1~15)



313住 (16, 17)



314住 (18, 19)

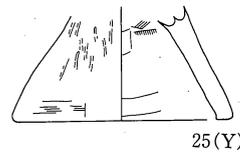
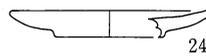
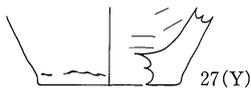
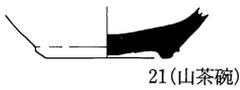
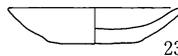


1溝 (20~22)



グリッド (26~28)

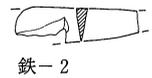
検出面 (23~25)



鉄器



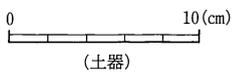
鉄-1 (鉄鎌)



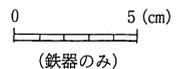
鉄-2



鉄-3



(土器)



(鉄器のみ)

第6図 出土遺物 (土器・陶磁器・金属器)

III まとめ

今回の調査地は、第6次調査地のすぐ北側にあたるため、検出されるであろう遺構・遺物についてはある程度予想をつけながらの調査が可能ではあった。実際、今回検出した遺構の時期は、第6次調査で出された結果に近いものが得られたといえる。ここでは、検出された遺構の時代ごとにまとめていきたい。

まず、第1検出面とした平安時代後期から中世にかけての面であるが、前回の調査では平安時代以降の遺構・遺物は確認されているものの、数量的にはそれほど多いとはいえない。それに対し今回の調査では、検出された主な遺構として、1溝、312・313住、1・3土、ピット群が挙げられ、全面に平安～中世の遺構が存在していることがわかる。そこで、これらの遺構の位置関係、切り合い関係についてみると、ほぼ東西方向に掘られた区画溝とみられる1溝が存在し、その北側部分にピット群が存在している。これらのピット群は、柱痕の残存するものもあることから、建物址を構成したものと考えられる。また、それらピット群に切られる形で312住が存在している。火葬施設とみられる3土は、1溝を切って掘り込まれている。これらのうちで、その時期を特定できるものは、312住が古代14期前後、平安時代後期にあたるといえるのみである。以上のことから考えると、まず312住と、それを区画する1溝が掘られ、次いで溝の改修が行われ、建物址（ピット群）が作られた。それらの廃絶後、中世になって3土が火葬施設として掘られた。1土は、遺物の出土はみられないが、周囲にあるピットに伴う中世掘立柱建物内の土坑である可能性があることから、1溝よりは新しいと考える。ピット群が建物址を構成するものであるとすれば、それらは南側にある溝によって区画されているため、それより更に南側にあたる6次調査地では平安時代以降の遺構が希薄になっているといえるのではないだろうか。

次に、平安時代の遺構面の約30cm下から検出された弥生時代～古墳時代の面についてであるが、ここでは314住、ピット、杭群が検出されている。314住は弥生時代後期の様相を示す住居址である。出土遺物の量は少なく、図示し得たものも2点と少ないが、床面中央部にある地床炉とともによい資料であるといえる。ピットについては、ほとんどが単独で検出されていることから建物址を構成するなどの可能性は考えられず、それらの時期及び用途については不明である。杭群は、314住の廃絶後、平安時代に至る前に掘り込まれているのが断面観察などによって明らかになっている。これらは、その覆土に砂を含むものが多くみられることから、水中に打ち込んだ杭が抜かれたか、あるいは朽ちた後に、砂が流れ込んだ様相を示していると考えられる。しかし、特に法則性をもって打ち込まれたとも考えられないため、その具体的な用途については解答を得ることはできない。314住の上面には、弥生時代の遺物を含む包含層が堆積している。住居址以外の遺構を判別することが出来なためグリッド調査を行ったところ、量的には少ないながらも遺物の出土はみられた。それは、南側の6次調査で確認された弥生時代の面へつながっていくであろうことを想像させるものであった。

以上、簡単ではあるが、同じ敷地内である第6次調査の結果と合せて考察してみたが、沖積地の堆積であることから遺構の判断は大変困難を極めた。そのため、十分な理解を得たとは言い難いが、従前に行われた他の調査及び今後に行われるであろう調査などと照合して、南松本一帯の古代史が解明されていくものと思う。

最後になりましたが、本調査に際し多大なご協力をいただいた大成産業株式会社をはじめ地元の皆様方、また梅雨時期の天候不順な中、発掘作業にご協力頂いた作業員の皆様方に厚くお礼申し上げます。

参考文献：「長野県松本市 出川南遺跡VI 緊急発掘調査報告書」 2000



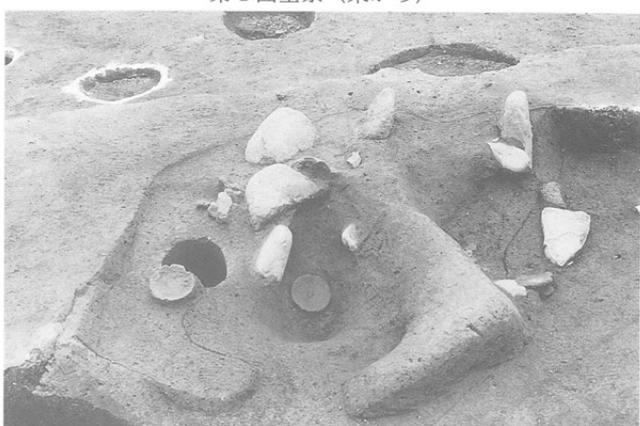
調査開始前（北から）



第1面全景（東から）



312住完掘状況（西から）



312住カマド遺物出土状況（西から）



第3号土坑炭化材出土状況（南から）



第3号土坑人骨出土状況（南から）



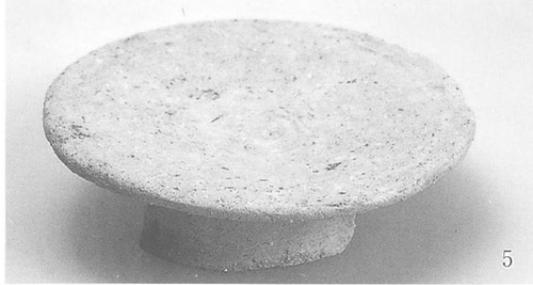
314号住居址完掘状況（南から）



弥生時代の流路址（北から）



1



5



7



9



10



13



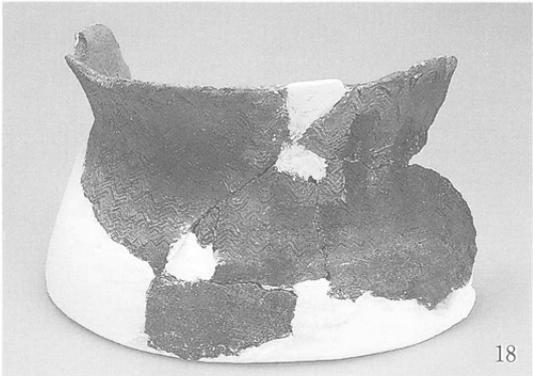
16



17



19



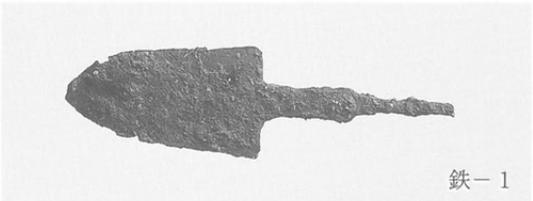
18



20



25



鉄-1

312住出土土器
土師器椀
1、13
土師器杯
7、9
土師器皿
10
土師器盤
5

313住出土土器
灰釉小壺
16
土師器高杯
17

314住出土土器
弥生上器甕
18、19

1 溝出土土器
土師器杯
20

トレンチ出土土器
弥生土器高杯
25

鉄器
検出面出土鉄鏃
鉄-1

出川南遺跡XI 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいでがわみなみいせき11きんきゅうはくつちようさほうこくしょ
書名	長野県松本市出川南遺跡XI 緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.161
編著者名	澤柳秀利・清水究
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 （記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市大字中山3738番地1・TEL0263-86-4710）
発行年月日	平成14年（2002）年3月29日（平成13年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南	ながのけん 長野県 まつもと 松本市	20202	177	36度 12分 17秒	137度 58分 21秒	20010522～ 20010615	188	民間マンション建設
		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
		集落址	弥生	竪穴住居址 1棟 ピット 5個	弥生土器		弥生時代後期及び平安時代後期の住居址を確認。その後中世には墓城となることが判明した。	
	古墳	土坑 1基 ピット 12個 包含層	土師器・金属製品（鉄鏃）					
	平安～中世	杭跡 138個						
			竪穴住居址 2棟 火葬施設 1基 溝址 1条 土坑 6基 ピット 79個	土師器・須恵器・灰釉陶器				

松本市文化財調査報告 No.161

長野県松本市

出川南遺跡XI

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成14年3月29日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社

